

曾田先生の三つの断片

吉山 美智子

個人個人が記憶に抱え込む思い出は、時として案外なぜそれなのかと思えるような他愛のないものである気がします。そのような諸々の思い出を紡ぎ合わせると、また新しい姿に触れることができる——かつての一学生として、私もそのような曾田先生の話をしきり聞きたいと思えます。

私はかつて他大学で中国文学を勉強していました。修士論文で研究していた秋瑾の詩文を扱いかねていたところ、先生から作品に興味を持たなければ文学はできないとの指摘がありました。私は彼女の作品だけでなく、その生き方や生きた時代にも興味があるのではないかと思い、歴史を勉強したい、東洋史が勉強できる大学はないかと探すようになりました。大学の図書館で紀要だったか、『史学研究』だったかを見て、私は初めて曾田先生の名前に出会い、そして広島大学へ学士入学しようと決心しました。

広島大学の学部3年生として初登校した日、私は曾田先生と既修単位の置換確認の作業をしていたのですが、その煩雑さにいささか辟易していたところ、曾田先生は突然おっしゃいました。「面倒くさいと思わないか、止め止め、来年、大学院を受験したらどうか」。

私はその言葉に触発されて、研究室を出る時には、両親にも誰にも相談することなく、半年後学部を退学して、改めて広島大学の大学院へ進学しようと決めていました。そして折角の半年間を有意義に過ごそうと、社会科の教員免許に必要な単位を可能な限りとりました。

私は今、社会科の教員として教壇に立っています。この原稿を書くにあたって、曾田先生の一言が、今の私とどこかで関わっているかもしれないと感じました。あの時、曾田先生と見にくい書類から一つ一つ単位を照合して最後まで辿り着いていたら、私の現在は違ったものになっていたかもしれません。

もう一つ、「メルクマール」という言葉。私はこの度まで意味がわからず、でも曾田先生と言えば、この言葉を思い出すのです。

マスター一年目、私も『東洋史学報』に書評を書くことになりました。もともと私がどのような文章を書いていたのか覚えていませんが、曾田先生に見て頂いたら「メルクマール」という言葉が返ってきました。私は、この言葉を加えることで、どこか文章の見栄えが良くなった気がして、何とか原稿を書き上げることができました。ただ、私自身その言葉を使いこなせていないと感じたまま、その後、使う訳でもなかったのですが、それでも当の書評の内容を覚えていないにも関わらず、この言葉だけは忘れませんでした。私はその時、言葉を使いこなせるためには、その言葉に見合った力が必要であると痛感すると共に、私もそのような力をつけたいと思うようになりました。今回「メルクマール」の意味を辞書で調べてみました。これから「メルクマール」を使う時があれば、曾田先生とこの原稿を思い出すでしょう。

五年ほど前でしょうか、曾田先生の還暦祝いの席に私も招待を受けました。その時、私は赤い花束を持っていきました。曾田先生はその花束を片手に、颯爽と帰っていかれました。その後ろ姿はやっぱりお変わりなく曾田先生だと実感したものです。これは誰もが抱く曾田先生像に近いものがあるのではないのでしょうか。

時にその豪気さ、知性を体現したその先にあるもの、私が大学を離れて十年たった今でも思い浮ぶ曾田先生像です。ここで皆々が持っている、その人にとっては特別な思い出を一つ一つ取り出してみたら、どのような曾田先生の姿が見えるのでしょうか。最後に、本当に他愛のない話であったと恐縮していますが、私の話も曾田先生像のごく一部、他の一部はまたいつか私にも聞かせて下さい。

(よしやま みちこ 博士課程前期 2001 年度修了生)



彦涵「把心願写在地球上」
『彦涵木刻選集』より